

「台湾独立論」私の考え

「一辺二国」か「二つの中国」か――。

民主化の進展がナショナリズムの昂揚をもたらす一方、大陸との経済的相互依存も加速している。

はたして「台湾独立」は現実的選択肢となりうるのか、日本はこの問題とどう向き合えばいいのか

日本近代史の証人として 感謝すべき存在

なかじまみねお
中嶋嶺雄 (国際社会学者)



る中国に呑み込まれてしまいかもしれない。

李登輝氏を後盾にしてこうした危機意識に立つ台湾團結連盟(台連)は、台湾の悲劇を歴史に深く刻んだ二・二八事件記念日の二月二十八日午後二時二十八分に、一〇〇万人が台湾一周の手をつなぐ「手護台湾運動」を繰り広げて民進党を応援、その余勢で總統選挙を勝利に導こうと全力を注いでいる。

自由と民主主義に立脚する高度に近代化された成熟国家であり、高信賴社である台湾の存在は、二三〇〇万国民の大部分がきわめて親日的であることとともに、日本の安全保障上の国益にとつても、またアジアと世界の将来における日本の国際的な立場からしても、わが国にとって決定的に重要な意味をもっている。

しかし、台湾がわが国にとつて重要なのは、これらの意義にとどまらない。台湾では最近、自らの歴史を中国史としてではなく台湾史として編纂し始め

る国民党・親民政権が誕生すれば、李登輝前總統が一二年間にわたって蓄積してきた台湾民主化と台湾人としてのアイデンティティ深化の路線が大きく揺らぐことになるからである。そうなれば、近年ますます強大化しつつあ

今回の台湾總統選挙は、中国・台湾・香港といった中華世界の命運を左右する重要な意味をもっている。日本の国益や将来像にもかかわる一つの岐路になるかもしれない。台湾人の政党である民進党が敗北し、中国が期待す

ていて、日本の五〇年間にわたる台湾統治の実績を高く評価してくれているからである。今年は日露戦争開戦一〇〇周年、日本が戦後六〇年を経てようやく自らの近現代史を相対的に再検討し、再評価しなければならぬ時期に、戦前の日本の植民地統治の功績を教育衛生、水利灌漑、農業改善などの社会改造の面から高く評価してくれる存在は、台湾をおいてほかにない。

李登輝氏などはまさに旧制台北高校の教養主義が育成した人材にほかならないけれど、同氏は去る二月十七日、わが国で多くの人々に感銘を与えた著書『武士道』解題——ノーブルレス・オブリージュとは』（小学館、二〇〇三年）の中文版出版記念会の席上、「戦後の日本には武士道精神がなくなってしまう。太平洋戦争を發動して敗北した後は、自分で自分を虐待する心理を生み出し、中国と見ればすぐに怖がり、贖罪の心理に充ちてしまう。だが問題は当時の日本の指導者が正しくな

かったからといって、すべての民衆が精神的に自虐的になることではないのだ」と述べ、新渡戸稲造の『武士道』を生んだ日本の旧制教育がいかに素晴らしいか、を説いている。このように台湾の人びとは自らの歴史的体験として日本の近現代史の証人となってい

台湾の戦略的価値を 知ることこそ重要

おがさき ひさひこ
岡崎久彦（外交評論家／岡崎研究所理事長）

台湾独立の是非は、人類の一般原則に照らせば、民族自決の問題として、もとより大事なことだ。台湾の人が自分の意思で台湾の将来を決められるというのが最善であろう。しかし、こと国際政治において重要なのは、善悪是非を論じることではなく、日本にとつての戦略的意味を考えることである。台湾が中国の一部であるか、別の存在であるかは、日本の安全保障にとつ

てくれているのであり、日本としては大いに感謝しなければならぬ存在なのである。

この事実からいつまでも目を逸らし、この事実からいつまでも目を逸らし、日本は国際社会でいかなる尊敬も受けないのではないか。



て、きわめて大きな問題だ。冷戦時代において、日本の北東海路はソ連の潜水艦が跳梁するところであったが、南西航路には何の脅威もなかった。中国の東海岸は水深が浅く、潜水艦を使うにくい。ところが、仮に中国が潜水艦基地として台湾を使えるようになれば、台湾から東は太平洋でもっとも深い海だから、サイパン、グアムまで障害もなく活動できる。日本の南西航路は、

「台湾独立」是か非か

【特集】**総統選は日本の問題だ**
岡崎久彦／小倉和夫／金美齡／朱建榮
中嶋嶺雄／並木頼寿／矢吹晋
リチャード・クロー／若林正文／若山樹一郎

4

2004
April
launched
in 1887

中央公論

明日を
読み解く

日本型国家社会主義 「年金・郵貯」を清算せよ

榊原英資

牛丼「復活」を 自立国家の悲願とせよ

森永卓郎

【特集】ケータイ文化は 退廃墮落社会の 予兆か



横山秀夫〈新連載小説〉「孤灯」